

研究要旨

テーマ：病気の予防～感染症の歴史から学ぼう～

対象学年：小学校第6学年

教科科目：体育科保健領域

使用した教材

- ・お茶の水女子大学ヒューマンライノバージョン開発研究機構編「Q&A シリーズ炎症・感染症」
 - p. 52 Q23 「新興感染症と再興感染症とは何ですか？」
 - p. 56 Q25 「パンデミックには心理的影響はないのでしょうか？」
 - p. 74 Q34 「感染症にかからないために私たちがすべきことは何ですか？」
 - p. 78 Q36 「予防接種にはどのような効果があるのでしょうか？」
 - p. 80 Q37 「定期接種の予防接種はどのように行われますか？」
 - p. 84 Q39 「学校感染症（旧・学校伝染病）って何ですか？」
 - p. 92 Q43 「結核は昔の病気と考えてよいのでしょうか？」
 - p. 94 Q44 「結核は治せる病気ですか？」
 - p. 96 Q45 「結核の予防対策にどのようなことをするのですか？」
- ・財団法人 結核予防会作成のリーフレット「結核の常識 2021」
- ・日本学校保健会制作、文部科学省監修「新型コロナウイルス～差別・偏見をなくそうプロジェクト」の映像教材「今、キミにできること～差別・偏見をなくすために～」
- ・お茶の水女子大学附属小学校児童用の健康手帳（予防接種の記録や健康診断の結果および受診状況、学校感染症に罹患した場合の出席停止解除に関する書式、欠席や遅刻・早退届などが1冊にまとまった手帳。毎日、通学鞆に入れて登校することになっている。）

問題と目的・授業案のポイント

新型コロナウイルス（以下、コロナと略す）は、私たちの暮らしや生き方そのものにも大きな影響を与え、感染症の恐ろしさを改めて思い知らせた。感染症はどうして怖いのか。それは、感染症のことを知らないからであり、人は知らないことに関して恐怖を感じる。その恐怖が人々を間違った行動に走らせたり、差別や偏見を生んだりするのである。感染症は、「病気」そのものの感染だけではなく、「不安」や「差別」といった心のあり様も感染し、弱者や同調しない人たちを追い詰め、病気はさらに広がっていく。このことは、世界で感染症が起こるたびに社会が崩壊し、分断してきた歴史がまさに今、くり返されているといえる。

未だ先行きの見えない状況の中、コロナと共に生きている子どもたちであるが、歴史の中でくり返されてきた感染症から学べるのではないだろうかと考えた。そこで、天然痘やペスト、スペイン風邪などと同様に、人類の歴史と共にあった結核に焦点をあてることにした。結核は、我が国では1年間に約14,000人の新しい患者が発生し、約2,000人が命を落としている感染症であり、決して過去の病気ではない。また、学校感染症にも位置づけられ、定期健康診断の項目でもあることや、乳児期に受けた注射痕がまだ体に残っている子どもも多い。

本学習で結核の歴史について知ることを通して、コロナと共存するために自分たちに何ができるのか考え、コロナが収束して新たな感染症が出現したときにも、不安に負けず、正しい知識と理解に基づいた冷静な行動ができる人になってほしい。さらに、一市民として集団や社会全体の健康へと考えていくための素地を涵養できるように、対話を通して育みたいと考え、授業づくりを行い、取り組んだ。

実践結果と考察

ヘルスリテラシーを基盤とし、さらに結核について学んだ知識をもとに、てつがく対話を行った。目の前にあるコロナそのものではなく、子どもたちにとって、自分とは別の遠いところにあった、結核という感染症の歴史と現在という新たなモノとの出会いを通して、コロナを始めとする感染症をなぜ予防しなければならないのか、立ち止まって考えてほしいと考えたからである。

結核に関する授業の導入では、接種痕を図に模したものを見せたり、クイズ形式にして、結核で亡くなった著名人やアニメキャラクターを紹介したりして、子どもの関心を引き付けることができた。また、自分の体に残る接種痕やこれまで意識して見たことはなかった自分自身の予防接種歴を確認することで、結核をはじめとする感染症について考えるきっかけになったといえる。

対話の中では、結核そのものについては、話題としては一言も上がらなかった。しかし、子どもたちの発言から、コロナをきっかけに、それまで通り過ぎてきた日常の当たり前なことや、健康でいることがいかに難しく大切なことなのかに気付くことができたと考える。対話の実際を見た哲学対話の研究者からは、コロナという目の前の体験や経験について語るのではなく、結核について学んだことをもとに、少し遠いところからズームアウトして考え、議論する中で自ずと結核について考えたり、別の角度から思考を深められたりしたのではないだろうか、それこそ、てつがく対話の魅力ではないだろうか、という意見を頂戴した。このように、結核を題材として取り上げたことは、目の前のコロナについて考えるための素地をつくるという意味で成果があったといえる。

対話の時間を増やすことで、さらに議論を行い、他者の様々な意見にふれることで、自分の考えをより深め、まとめられる時間を確保できるとよかった。しかし、感染症や健康について、これからも考え、問い続けようとする素地をつくることはできないかと考える。

大学や他校園との接続や連携に関する示唆

人はなぜ恐れるのか、恐れや不安の役割について、心理学な側面からについて大学教員をゲストティーチャーに招き、専門家の話にふれる機会をもつ。

附属校園では、感染症についての学習をスパイラルに取り組み、系統立てて考えていくことができるだろう。既に保健指導や教科保健で学習していると考えられるため、接続を意識して、感染症の予防を考えていけるとよいだろう。以下は、考えられる取り組みの例である。

幼稚園

未就学児は様々な予防接種を行う時期でもある。BCGの接種痕（ハンコ注射）を見せて、どうして注射をするのか子どもに問いかけてみたり、保護者へのヘルスリテラシー教育を進めたりすることが考えられる。

中学校

ヘルスリテラシーについて。健康情報の見極め方や実践について。

高等学校

1年生は定期健康診断で胸部エックス線写真を撮る。その際に、結核の歴史について学ぶ機会をもつ。ヘルスリテラシーについて。

今後の展開の可能性

感染症を1つ選んで歴史や背景、予防方法などを調べる等を行い、その成果を他者に伝達する学習プランの計画・展開。

社会科（歴史）や家庭科（SDGs）など、他教科との合科的な指導を行うことにより、子どもたちにとって、さらに充実した学習となることが期待できると考える。

結核だけではなく、例えばハンセン病を題材にし、ハンセン病資料館を見学したり、当事者から話を聞いたりすることで、人権学習を深められるだろう。また、学校医から予防接種をはじめとする病気の予防について話を聞くことも考えられる。